

科学技術政策担当大臣と有識者議員との会合 議事概要

- 日 時 平成 23 年 4 月 28 日（木）10:00～11:36
- 場 所 合同庁舎 4 号館第 3 特別会議室

- 出席者 阿久津政務官、相澤議員、本庶議員、奥村議員、今榮議員、白石議員、青木議員、泉統括官、梶田審議官、吉川審議官、大石審議官

- 議事概要

議題 1. アクションプランの検討の進め方について

（事務的な打合せであるため非公開）

議題 2. 当面の科学技術政策の運営について

<鈴木参事官説明>

- 白石議員 基本的にはこれでいいですけれども、一つ、日本の科学技術政策の運営についてだからしょうがない面はあるのですけれども、日本のことしか書いてないんですね。ところが、例えば今回の原子力発電所の事故の問題というのは、世界的な認識としては、たまたま日本で起こったけれども、世界のどこでも起こりうる問題だったのだと、その意味でこれはグローバルな課題なのだ、そういう認識というのは強烈にあって、そこで日本政府の特に初期における対応が逆に批判された面もあるというように私は理解しております。

その意味で3カ所ぐらい少し言葉を足していただければと思います。一つは、最初のパラグラフですが、「その影響は東日本のみならず、我が国の社会・経済の広範に及んでいる。また、今回の大震災は、社会・経済システムや国民の人生観・価値観、ライフスタイルについても変革を迫っている。」、全部日本のことしか書いてないわけですね。この後に、文章はお任せしますが、「さらに、今回の原子力発電所の事故によって惹起された原子力平和利用に関する安全性確保の問題は、改めて世界的課題として認識されている。」と、そういうような文章が一つ入っておく必要があると思います。

それに関連して、2ページの基本姿勢の「新たな挑戦」の最初のパラグラフの後に、「我が国は、原子力平和利用の安全性確保の問題については、国際機関、各国政府と高い透明性をもって全面的に協力していかなければならない」とか、そういう文章が入るべきだと。

その次に4ページの真ん中ですね。「非常時の科学技術に関する内外のリスクコミュニケーションの在り方」で、「また」以下です。2番目の文章ですが、「また、原子力発電所の事故に関する情報が云々で、国内外で誤った認識が解消されないことの一因…

…」、これも発信すればいいという話ではないわけですね。つまり、こういう原子力発電所の事故についてのデータを共有して、世界的に対処すると、そういうやり方をする必要があるんだと、ここをぜひ考えていただきたいと思います。

○奥村議員 全くそのとおりで。もう一つ加えさせていただくなら、そのときの主体を明確にしないといけないということです。

○白石議員 そうです。

○奥村議員 それがあって初めて意味がある。日本政府であったり、もう少し限定できるものであれば主体を明確にしたうえで国際的な関係は極めて重要な視点だと思います。

○本庶議員 その主体がはっきりしないところが問題であって、それを政府とやってしまうと、またぼけてしまうんですね。

○白石議員 そうです。だけれども、それ以上言いようがないというのが。そこが、一番とは言いませんが、今回明らかになった幾つかの非常に重要な問題の一つだろうと思います。

○相澤議員 ただいまの内容について記載すること自体は皆さんご同意だと思います。ただ、その主体の置き方、それを含めて「検証」という言葉が入ってきているわけなので、そういうことが今後きちんと検証されるということがあるので、この辺の主体の書き方は少し工夫していただくということで。

○奥村議員 私はコメントを提出しているので発言させてください。

○相澤議員 今のグローバルな点ですか。

○奥村議員 グローバルも含めて主体の話です。

私のコメントは議員の方のお手元に配布されているのでしょうか。ポイントだけご説明申し上げますと、最初のページのセカンドパラグラフですね、「特に、この大震災」以下いろいろ書いてあるのですが、検証しなければならいとなっているけれども、これは誰が検証するのかという主語が書いてない。したがって、先ほどの特定できないケースもありますけれども、少なくともそれぞれの研究者であり、民間の技術者であり、また、文科省あるいは経産省を含めて、我々政策担当者と、せめてこれぐらい明記しないと、主語のない文章で極めてまずいのではないかということが一点。

それから、2ページ目の下のほうですね、「科学技術政策の見直し」と書いてあるのですが、「大臣と有識者議員は真摯な態度で振り返る」と記述されている。「振り返ってこれまでを検証する」、その一言が要るのではないか。原文では「振り返る」となっているだけなので、これでは不十分ではないかということですね。

次は、少し飛んで4ページですが、「総合科学技術会議の運営の見直し」というのが書いてあるけれども、これはやはり「運営の改善」であるということと、第4期をこれから再検討するわけですが、「基本計画に基づいた主要課題の解決に向けて運営の改善についても見直しを行う」のではなくて、「運営の改善を行う」というほうがすっきりしているのではないかということです。

主要なポイントはそういうことで誰が何をするのかということを確認に入れるべきではないかと、そういう趣旨です。

○相澤議員 先ほど前半のグローバルな視点でという点と、今の主体を明確にするという点で、ただいまの奥村議員のご指摘のところについてご意見ございますか。

よろしいでしょうか。それでは、全体を考慮して、その部分についての修正をいたします。

○本庶議員 少し細かいことになりますが、最初の「重大な反省をすることとなった」という意味がどうなのかなど、せめて「反省をするものである」とか。「我々は」と主語になっているのですから、そのぐらい明確に言い切るべきではないかと。

それから、3ページのところですが、先ほども言いましたが、真ん中の（復興・再生）のところですが、「自然災害からの安全性の向上」ということに加えて、「重大な危機状況」とか何か。その言葉が全般に何回も出てきますけれども、その視点をここに入れておいたほうがいいのではないですか。つまり、原子力のことを念頭に置いた、そういうニュアンスが出るような感じにしておいたほうがいいのではないかなと。

それから、4ページ目の「リスクコミュニケーション」のところは、「風評被害は、農作物、工業品等の安全性」というよりは、「等について科学技術に基づく正しい安全情報が消費者に伝わっていないこと」と。これはまさに修正だけでありますけれどね。「安全性の情報が伝わっていない」と。事務局にまた。その程度のことです。

あと一つ、言葉でちょっと気になったのは、5ページの2段目に「原子力発電所周辺地域……」、ここは「地域住民の健康調査」でいいと思うんですね。「地域の住民の人々の」というのは、「地域住民の健康調査」でいいのではないのでしょうか。

それから、6ページの4. の1行目のところ、ほかは全部「社会・経済」になっているのに、これは「経済社会」になっているので、これは統一していただいたほうがいいですね。

それから、「自然災害からの安全性」、このことはワーディングを整理して統一していただくと。それだけです。

○奥村議員 この安全性のところは、何を対象にするかというのは結構ポイントだと思います。ご指摘のように原発のことは大きいですが、今の時点で、原子力の今回の事故の技術的な検証が終わっていない段階で、府省の個別施策をここで誘導するというのは、あるクライテリアを決めないと混乱するおそれがないかなとということで、今回はこの「自然災害」のところを基軸に区切ったほうがいいのではないかなと。

グリーンイノベーションのところに、「エネルギー政策の見直しの方向を見据えつつ再検討を行う」と。このときに同時に、当然、原子力の安全にかかわる内容についても触れることになると思いますので、そこで入れたほうが一体化してよろしいのではないかと。そういう考え方なのですけれども、いかがでしょうか。

○本庶議員 もしそういうお考えであれば、例えば、今すぐのアクションプランとか何とかは現状のままにしておく。ただ、第4期というところになると危機的な、3ページのところですね、そこを分けて考えるというのであればよろしいのではないのでしょうか。

○奥村議員 全くご指摘のとおりだと思います。

○今榮議員 まず、「復興・再生そして自然災害」と書いてある、この「自然災害」というのを、原子力発電が100%自然災害であったかということは少し疑問がありますので、むしろ「自然」なしに、ただ「災害からの」としたほうがいいのではないかなというのが一つ意見です。

それから、大きなところでは、6ページで外国人研究者の話が出ていて、やはり外国人研究者に絡む話が4ページの人材のところに出ているので、ここは整理してどちらか一方に、おそらく6ページのほうは少し整理して割愛していいのではないかなと思います。

それから、4ページのところで、日本人研究者が海外に移動して、それは頭脳流出が進展して、科学力が落ちると書いてあるんですが、人材のほうではなるべく若い人は出ろと言っているのに、ここで抑制しているというような感じにとれますので、実際には大型施設のところでは既にもうそういう動きを出して、若い人にどんどん外国の施設で研究を続けろという方向を出しているんですね。私としましては、これを機会に若い人の循環が起こればいいと思いますので、ここの「基礎体力の大きな打撃を受ける」というところはもう少し緩和した形で書いていただきたいと思います。

あと、細かいところで、最初のページのところで、「原子力をはじめとする技術システム」と書いてあるんですが、原子力そのものは技術ではないので、原子力発電が技術ですので、この辺の言葉の使い方はきちっと書いたほうがいいかなと思っております。

それから、2ページの真ん中辺で、「被災地域の人々が、安全で人に優しく環境と調和した地域社会の中で」と、これがどういうふうに絡んでいるのかがよくわからないので、もう少し簡潔に書いていただいたほうがいいかなと思っております。

あと少し言葉的なものがありますけれども、また機会があればコメントさせていただきたいと思います。

○相澤議員 幾つか重要なご指摘がありました。特に4ページの「頭脳流出」という表現ですね。確かに今榮議員が言われたように、総合科学技術会議としても、国内に閉じこもるな、海外へどんどん行って、むしろブレインサーキュレーションを活性化すべきだというトーンできているわけなので、ここの書き方だとそれをまたブロックしてしまうような表現になっているんですね。ここは以前も議論がありましたが、直っていないので、ここをどうしようにしたらよろしいでしょうね。最終結論としてまとめなければいけない段階です。

○阿久津政務官 これは、意味合いとしたり、海外等で武者修行みたいに一生懸命やっていただいたり、あるいは、時々海外に行きながら学びつつ交流も果たしつつ、最終的にはそのエキスをも日本に持ってきてもらいたいという部分が入っていればいいと思うんです。そんな意味合いだと思うのですが、そういうように文章を修正して。

○白石議員 私、メモの中で「ブレインドレインが心配なのだ」と書いたのです。そのときの趣旨は、若手の研究者を考えたのではなくて、世界でそれぞれの分野でハブになっているような先生が外に出て行って戻ってこないというのは心配だろうと。仮にとりあえずのところ2年ぐらいどこかに行かれるにしても、また戻ってくるような措置を担保するとか、そういうことをやる必要があるのではないかということを考えながら、ブレインドレインのことは提起しております。ですから、先生の言われることはまさにそのとおりで、ここは少し丁寧に書いたほうがいいのではないかと思います。

○奥村議員 これは頭脳流出が進展して大きな打撃を受けるという現象を言うのではなくて、頭脳流出を防ぐような施策なり仕組みを記述するのはいかがか。例えば定職のポジションはきちっと確保しておくとか、そういう事を各機関で工夫するような対策を具体的に書かれたほうがいいのではないですかね。

○大竹参事官 今のところですが、書きぶりとしては、現象とか問題を説明して、そこから具体的方策を明らかにすると書いて、これは基本計画の意見具申の中で丁寧に議論することなので、むしろ今のご議論のところをちゃんと入れるほうがよろしいのだらうと思ひまして。例えば、「また」の後、若手の人間が外国で武者修行してくるのは歓迎するんだけど

も、今、白石先生おっしゃったように、「加速し、本来、日本で中心となる研究者まで外国に行ってしまうような事態が起こると」ということだと思うんですね、事象としては。そこを丁寧に書くことでよろしいのかなと思うんですが、今のご議論では。

○今榮議員　私が気にしているのは、「基礎研究及び人材育成の強化」のところにその項目が入っているから、シニアの方がここに入るかということ。そういうことであれば入れる場所が違うのではないかなと思うのですが。

○大竹参事官　ハブになる研究者がいないと、若い研究者は背中を見て育つわけで、その背中がいなくなってしまうと人材育成できないのかなと。必ずしも研究業績だけではなくて、あの先生に憧れて科学者として大成しようという人が日本にいなくなると、皆さん外国に出ていってしまうということになると思うので。そういう観点から人材育成のところでもよろしいのかなと思ったのですが。

○相澤議員　ここのタイトルは、人材育成だけではなく基礎研究そのものですから、その部分に厳しい影響があらわれないようにという観点からだと思います。

それでは、皆さん意図されているところは共通ですので、表現ぶりをそのように工夫をお願いいたします。

○青木議員　今のところなのですけれども、本当に研究者は国際化してグローバル化していると思うんですね。だから、書きぶりの問題だけですけれども、外国人研究者が外国に戻っていくのも、日本人が外国に行くのも、度合の差だと思うんですね。大事なのは優秀な研究者が日本で研究しやすいというふうに聞こえるように、外国人と日本人を区別しないように配慮していただけたらと思います。

1 ページの最初のところで、第1段落の最後に「国民の人生観・価値観、ライフスタイルについても変革」と書いてあるのですけれども、ライフスタイルという言葉は、私のイメージとしては、東京の人が停電で、テレビがすぐかかるのではなくてしばらく待つのを我慢するような問題のような気がするんですね。これが問題になったのは海辺で生活している人が海辺に住むか住まないかという生き方の問題だと思うので、ライフスタイルよりも少し重厚なというか、生きがい、生き方というような言葉に変えていただけたらと思います。

それから、4 ページのコミュニケーションのところなのですけれども、皆さん問題意識は同じだと思うのですけれども、今回の情報の伝わり方でひとつ違ったのは、トップダウンとは限らなくて、政府なりオフィシャルにリリースされた情報を基にいろんな人が意見や分析をやっていたということで、それを見抜く力が国民にあるというのが非常に重要だなということを考えたので、サイエンスリテラシーの重要さというのが一段と鮮明になったと思うので、そのことをこのリスクコミュニケーションのところにに入れていただけたらと思います。

○本庶議員　この段落の最後の文章は少し意味不明ですね。

○相澤議員　4 ページですか。

○本庶議員　ええ、リスクコミュニケーションの、「重要であるところ、このようなことも含めて再検討を行う」というのは、何を再検討するのか。「このようなことを含めて」というのは意味するところがわからないので、「重要である」なら「重要である」で切っているのではないのでしょうかね。

○相澤議員　ここのところは「重要である」で切ってしまうと、どうするのかというアクションが

ないので、「再検討」という言葉が入ったのだと思います。文を切ってその趣旨がわかるようにするというので、修正させていただきます。

○奥村議員 同様にコミュニケーションのところですけども、この短い中にいろいろ書いてありますが、書くべきことはおそらく3つだと思います。一つは、最初に出てくるいわゆる風評被害にかかわる情報の伝達のまずさ。それから、2番目は、一般国民に原子力の今の状況はどうなるのかという話ですね、これは広く国民一般と海外が対象。それから、もう一つ重要な点が抜けているのは、コミュニケーションというのかどうか、要するに津波の被害のときに地方自治体が正しく住民に避難の方法を伝達していたのかと、という問題です。数十分時間があつたわけですね、地震が起きてから津波が来るまでに。新聞報道などを拝見しますと、避難の方法で大変不幸な地域があつたわけですね。この3つを明確に意識して書いたほうがよろしいのではないのでしょうか。

○相澤議員 具体的には、どこを修正いたしましょうか

○奥村議員 上から2番目ですね。最初の部分が風評被害で、「また」が国民のことだと思いますね。最後の地域住民に対するところの表現が要るなと思いますが。「平常時はもとより」という、この最後の文章のところのわかりにくいので、ここにもう一つ、今の避難された地域住民への情報の伝達の仕方、これを明確に入れたほうがよろしいのではないかと思います。

○相澤議員 この部分には、先ほど白石議員が言われた国際的な観点からの問題が間に入りますから、その次でしょうか。

○奥村議員 事の大きさで言えば、地域住民への正しい避難の情報伝達、これは事の大きさとしては一番大きいですね。これは技術の問題というより、ほかの要因があるかもしれませんけれども。

○相澤議員 その問題をここでは何をすべきだというような方向に表現するポイントですね。ここを含めて文章上の表現を、後でも結構ですから、ご示唆いただければと思います。

○阿久津政務官 「再検討」という言葉は、最後飛ぶのですか、残るんですか。

○相澤議員 これがないと、ここで言っている意味が、ただ「重要だ」と言っているだけではいけないので、文章を切って、何を再検討するかということを明らかにした文章にすると。

○阿久津政務官 イメージだけでいうと再検討がややゆっくりな感じがするので……。

○相澤議員 そうですね。

○阿久津政務官 もう少しスピード感を出せる表現にされたほうがいいかもしれません。すみません、では何なのだというのが言えなくて。

○相澤議員 そうです。「再検討」をとってしまうと、ただ重要なところを指摘するだけですから、何をするのかということを明確にしてこの文章をつくと。

○泉統括官 この全体のコンテキストは、8月に向けての科学技術基本計画の再検討の方向を示しているということでございますので、そういうコンテキストの中で今のスピード感というようなことも含めて……。

○相澤議員 先ほど今榮議員が、2ページの基本姿勢の新たな挑戦の第2パラグラフの最初の「安全で人に優しく環境と調和した」という部分の内容が明確でないということで、ここを修正することになりましたが、そのときに「環境と調和」したというのは、今回この中に出てくるときに環境というとらえ方がいろいろと問題になるので、「環境と調和」というよりは、今回の自然からの挑戦ということできいろいろと対応してきたと。しかし、

自然は脅威があるということを基にして、自然と共生していかなければいけないという意味で、私は自然と共生したというような形にしたほうがよろしいのではないかと考えております。

大変重要な点がございましたので、単純に言葉として修正するということについてはここで明快になりましたので、そこは即させていただきます。

それから、基本的には皆さんの見解は一致したけれども、それを文章上どういうよう
にあらわすかということについては、事務局にこの後修正を検討させていただきます。

全体のところについてはこれでご意見をいただいたことになるかと思えます。

阿久津政務官、今まで現場対応で本当に大変なご苦勞をされてきたかと思いますが、本日、このようにご出席いただきましたので、いかがでしょう、この内容についてのことでも結構でございますし、あるいは、もっと全般についてのことでも結構でございますので、一言お願いしたいと思います。

○阿久津政務官 機会をいただきましてありがとうございます。私のほうは、3月11日に地震が発生して以降、14日からほとんど、仙台のほうに政府の現地対策本部をつくらせていただきまして、そちらのほうに常駐しておりました。1週ごとに状況が変わってきて、各ステージで被災者の方々の思いも変わっているのですけれども、今、私がお伝えしたいのは、自肅とか後ろ向きに被災地の方々は考えているのではないかとすることは決してないということをお伝えしたいと思っています。

これから、どういうようにこの人類史上稀な事態を受けて私たちが再び飛躍できるかということにかかっていると思っております。そういう思いを被災地の方々も期待していると。ですから、科学技術の部分についても、ぜひ前に向けたトーンを出して、未来に光を灯していただくと、全体としてありがたいし、私たちの役割なのではないかと僭越ながら考えております。

○相澤議員 本場に現場での大変なご苦勞をしていただいた政務官からの非常に重い言葉であるかと思えます。私どもも十分にそれを受け止めて、科学技術政策を進める責務を果たしていきたいと思えます。

それでは、ただいまの「当面の科学技術政策の運営について」でございますが、この内容は、科学技術政策担当大臣及び総合科学技術会議有識者議員の個人名を出しての内容になります。したがって、本日、政務官にはご出席いただいておりますが、玄葉大臣にご出席いただいておりますので、この内容を即大臣にお伝えし、大臣のご意見も反映させた形で最終的にこれを公的に外部へリリースしたいと考えます。

ただ、大臣のご予定もなかなか厳しい状況かと思えます。この辺のところについては、大竹参事官のほうから状況を説明していただきたいと思えます。

○大竹参事官 今、相澤議員からお話がありましたとおりなんですが、政務官にも途中からお入りいただき、さっと見ていただいただけですが、コメントをいただければと存じます。

まず、きょうの段階では有識者議員の先生方のご意見を集約したということで修正をいたしまして、それを大臣、副大臣、政務官のほうにお届けして。大臣は、明日予算委員会が予定されておりますので、今日は本会議まで夜の日程がぎっちり詰まっているようございますので、その辺のところは少しご容赦いただいて、大臣までこの文章の中身につきましてご納得いただいた段階で、その日付け、29日とか30日になってしまうかもしれませんが、あるいは、5月1日、2日というのもありうるかもしれませんが、そ

の日付けでこの文章をセットさせていただくということをお願いできればと思います。

○相澤議員 この内容について、政務官からはいかがでしょう。

○阿久津政務官 この内容についても、それから、先生方のこの文章に対するご意見も、私は玄葉大臣の方向性と一致していると思いますので、その上で最終確認がいただければありがたいと思っておりますので、よろしく願いいたします。

○相澤議員 それでは、ただいまのような状況でございますので。資料1は4月28日付けになっておりますが、これが対外的にこの内容として確定されたものとして出るのは日付けが異なるということでございますので、特にプレスの関係の方々の取扱いについてはそういう事情を理解していただきたいと思っております。

(以 上)